

紀伊半島南部における山蜜蜂の 伝統的飼養について

井上 直人・井上 梓

全国の多くの例にもれず近畿地方の山間地域では、過疎と高齢化が進み、農山村の伝統的技術や生活に関する民俗情報が激しく流亡しており (genetic erosion に対応した用語をあてるならば, erosion of ethnic knowledge [ethos]), それと同時に農林産物の種類も減少し続けている。そのような中であって、まれにはあるが、古くからすたれることなく住民によって脈々と利用し続けられ、現在栽培化 (家畜化) の渦中 [註 1] にある野生生物を見出すことが出来る。その一つに、山間部の人々にとって重要な有用昆虫の山蜜蜂 [2] (ニホンミツバチ *Apis cerana japonica* Radoszkowski) がある。

栽培 (家畜) 化過程のまれな事例の実態を知ることと、その伝統的飼養法をささえる自然認識や文化的意味、そして蜂に対する人間の作用などを明らかにし、蜂の飼養を通して見た生物に対する住民の認識を知ることが資源生物学の基礎として意義が大きい。この論文では、さらに分封した群れをひき留めるための民具とその意義についても報告する。

方 法

本研究では、技術の実態と文化的側面が切り離されないよう心掛けて調査・記録した [3]。この方法は、生物に対する民俗知識がどのように生業活動に使われ、自然認識に影響しているか、また逆に精神的活動がどのように技術や生物に影響していくかを考察するためには必須である。

1. 調査地域

近世の熊野地方は山蜜蜂の蜜の大産地であ

り、江戸時代には自然の蜜の採取だけでなく、樽などを人工巣箱として用いて採蜜していた「日本山海名産図絵 (1799)」。また、明治時代に太古蜜として商業的に人気を集め (東牟婁郡役所, 1970), 地元でもよく知られている。この地方では大正時代から昭和にかけて一時的にセイヨウミツバチの導入が試みられたものの、洋蜜は自然条件にあわずに消滅し、昔ながらの山蜜蜂だけが残った。生産量は少ないものの、国内では最も飼養の盛んな地域である。調査は、いわゆる「熊野蜜」の大産地である古座川、本宮、熊野川、の各町を中心に行い、あわせて古座と串本の各町を調査した。調査地は紀伊半島で最も標高の高い大塔山 (おおとうさん) の山系と、古座川と熊野川の源流部である。とくに大塔山とその南側に位置する松根地区の間の地域は、大河 (太河とも太古とも書かれる、呼び名はたいこう、たいごう、たいこ) と呼ばれ、熊野地方産の蜜の中でも最も上質の蜜がとれる場所とされる (原, 1981; 東牟婁郡役所, 1970; 野本, 1990)。

2. 調査方法

1994年にこの地方の山中で山蜜蜂を飼養している住民と周辺の方々を対象として聞き取りを行った。内訳は山仕事などで生計を立てていたお年寄り (男性2名, 女性4名) である。情報の多くは、古座川町松根 (まつね) の中地貞吉さん (なかじさだきち, 1911年生, 84才男性), 本宮町久保野栗垣外 (くぼのくりがいと) の古根川博さん (こねがわひろし, 1922年生, 73才男性), 古根川コカネさん (1922年生, 73才女性), 古座川町中崎くぼ在住の串橋明雄さん (1915年生, 80才男性) によるものである。ま

た同様の聞き取りには本宮町森千江さん、古座町森博司さん、串本町神田京子さんおよび中地さんの奥さん、古座川町中崎の前さんの奥さんにも協力いただいた。この調査でわかる時間的範囲は明治時代まで、地理的範囲は古座川と熊野川の源流一帯から、十津川までの状況である。

結果と考察

1. 飼養の歴史

古座川松根上流の大河周辺は明治後期から大正前期にかけて原生林が伐採され（高野山大学、1993）、さらに昭和30年代の拡大造林の時期にほとんどが伐採された。伐採前の明治時代には、太河で大規模に山蜜蜂を飼っている人がおり、須川さんという人は蜜蜂の住む巣箱を100箱も所有していたほど盛んであった（中地氏談）。東牟婁郡誌など（原、1981；東牟婁郡役所、1970）にそれを裏付ける記録がある。またこのころには七川や（串橋氏談）、十津川村でも山蜜蜂が家々で盛んに飼われていた。

現在、松根地区で約200個の巣箱が置かれているが、そのうち10%に蜂が入る程度であるという。一方、熊野川町の熊野川支流の北の川の源流では50～60個の巣箱が置かれ、蜂はその内40%程度に巣を作っている。蜂の空き巣箱への定着率は30年ほど前から同じ状況であるとされ（古根川氏談）、地域により定着率は若干異なっている。これは当地の人々も知っており、本宮町よりも山深い北の川方面の方が蜂の定着率が高いと言う。人々の間には、山の植相（主に黒木[4]の量）との関係があるとの共通した認識がある。

また明治時代までは、熊野川町北の川流域で蜜を集めて、5升入るカメに蜂蜜を入れて、山の中を色川を抜けて那智勝浦まで徒歩で運び、米などと物々交換して暮らしている人々がいた（古根川氏談）。蜜蜂ではないが、山でとれた芋虫を串ぎしにしたものを古座まで売りに来たという話があることから、当地の山の昆虫には経済的価値があったと想像される。

2. 山蜜蜂の生態認識

飼養する山蜜蜂の生態や山の環境に対する認

識は、人々の観察や経験や情報交換の積み重ねによって変わるので、全く同じ答えを得ることはできないが、聞き取りの情報から古くからの認識をうかがい知ることができる。聞き取りの詳細は他の機会にふれることとし、ここでは山蜜蜂の性格についての住民の知識の主な数点を上げるに留める。(1) 臆病である（巣を横にしたり打ったりすると暗い方に逃げる）、(2) 巣が気に入らないと、すぐに出ていってしまう「自然のもの」である、という飼養しにくい性格がある一方で、(3) おとなしい（飼い主を襲わず、分封時などに素手で触れても刺さない）、(4) セイヨウミツバチに比べると、蜜源として小さい花を好み、山の木をうまく利用できる能力があり、(5) セイヨウミツバチが冬を越せない山の中でも生きてゆける生活力を持っているなどの優れた点が認識されている。(4)と(5)は、明治から昭和にかけて導入されたセイヨウミツバチが蜜源の不足により越冬できなかったり、移動養蜂によって一時的に滞在したセイヨウミツバチが同じ地区の山蜜蜂の群れを駆逐したという観察と経験から得た比較生態的特徴の認識である。

3. 飼養する人にとっての山蜜蜂の意味

すでに述べたように、明治時代までは山蜜蜂の蜜の採集は山奥の住民にとって経済的意義が比較的大きかったが、現在は、主として自家消費や地域内での売買がなされる程度である。しかし、山蜜蜂は採蜜の効率は悪いものの、他では得難い品質であるため高価である。山蜜は、飼養の中心地である古座川町や本宮町や周辺の町村の人々に人気があり、「やまみつ」や「くろみつ」とも呼ばれ[5]、売るときは1升15000円から10000円で取り引きされ、セイヨウミツバチの蜜に比べ4倍以上の高値である。

むしろ注目すべき点は、このような市場経済的価値よりも、飼養する人々にとって一つの楽しみになっていることである。聞き取りで共通して得られるのはこの点であり、楽しみの理由には、(1)「はちと人の駆け引きがおもしろい」、(2)効率は悪いが、セイヨウミツバチの飼えないような深山でも、「ねばい」、「重い」、「黒

い」最高の蜜がとれる、そして(3)「自然のものである」という認識が上げられる。

駆け引きのおもしろさとは、すべてを人がコントロールするのではなく、蜂の自由な活動を妨害しない程度に利用するという難しさであろう。すなわち蜂の自由な活動がなければ蜜は取れないが、工夫しないと逃げていってしまうし、蜜をとりすぎると冬期に死滅するなどといった難しさに挑むおもしろさである。とりわけ分封した群れをさまざまな手段を使って上手にコントロールし、新しい巣箱に誘導する時にそのおもしろさを感じられるらしい。まるで一つの意志があるように山蜜蜂の分封群が一ヶ所に集合して玉になったり、突然移動したり、分担して活動する様を観察し、それをコントロールすることにおもしろさを感じるのは極めて自然であろう。

「自然のものである」という語は聞き取りの生の声である。なぜ、この点に価値を見出すのであろうか？ 農薬を多量に散布するミカン園で飼われるセイヨウミツバチの蜜と異なり、山蜜蜂の蜜は非常に清浄であるという食品自体に対する認識の他に、自然をなるべく壊さないようにうまく利用しなくてはならないという伝統的な考え方と、その考え方自体やさまざまな生物に対する愛着があるからであろう。これは製材不能の中空の自然木を活用して自然のウロのある大木をまねた丸太巣箱を作ったり、採蜜の際に群れを全滅させないように採蜜量を加減したり、蜜源となる樹種が生育する山をたいせつにする行為からも間接的に理解できる。

さらに、山蜜蜂は、(1) 浄、不浄のもの(清浄を好む)、(2) 家の盛衰にかかわる(蜂の盛んな増殖が「盛り」や豊穡の印、従って吉兆とみなされる。飼い主が元気だと群の数が増えてゆくが、死去するとすぐに何処かに飛び去ってしまうとされる。これは実際に身近に起こった経験でも裏付けられているという。飼い主の状況が鋭敏に山蜜蜂の行動に反映する点を裏返せば、不吉な兆しということにもなる：本宮町、十津川村)、(3) 神の使い(昔からお伊勢さんの使いと言われている：本宮町古根川夫妻談)、

(4) 神聖なもの(今でも、新しいウトーを置く時に塩をふる人や酒をふる村人がいる。明治の人はそれを置くのは暦の社日 [6] と作業暦を決めていた：本宮町)。

「ミツバチは熊野さんの使い」という伝承は長野県伊那谷でも報告されているが4)、熊野以外の地域から来た神の使いとする伝承は今回は見出せなかった。いずれにしても、この地方では山蜜蜂は「ハレ」の、そして「神聖な」動物として位置づけられている。さらに、明治にはこうした考え方が現在より濃厚であったとのことである。現在、特定の蜂群を家の近くに飼い、蜜を収奪しすぎないように注意し、まるで祠のようにそうじや手入れをして大切にしている場面がよく見られるのは、丸太巣箱の形態による雰囲気だけに由来するものではなく、このような精神的背景がかかわっているであろう。

蜂の動態と家の盛衰との関係や神の使いであるとする見方は、南方(1971)や渡辺(1994)によると西洋にもあり、それは古代ヨーロッパに遡れるとされる。澤田(1986)は現代のハチと人の関係を調べ、セイヨウミツバチの近代養蜂やハニーハンティングでは家の盛衰との関連づけのようなヒトとハチの密接な関係が見られず、人工巣箱を準備する伝統的養蜂においてのみ認められるとしている。近代の西洋的な考え方が浸透するにつれて、古くにはあった考え方が消滅したとも考えられるが、ハニーハンティングする民族には蜂を神聖視する見方が欠けているとすると、栽培化(家畜化)にいたる特定の過程でのみ現れる考えであると考えたほうがよいようにも受け取れる。日本の他の地域や(岩崎・井原, 1994; 杉本, 1989; 吉田, 1990)、他のアジア地域(中村, 1987; 小野, 1992; Oschmann, 1961; Woo, 1991)における蜂の研究では飼養技術自体に注目したものが多く、アジアにおけるミツバチを神聖視する文化的習俗(態度)の意義はまだよくわかっていない。この点を明らかにすることは、技術や生物に及ぼす精神活動の影響を知る核心部分であるように思われる。今後の精緻な調査が必要であろう。

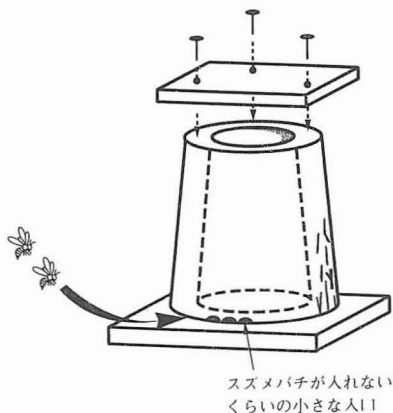


図1 ゴーラなどと呼ばれる丸太巣箱の構造

くろみつには特別な効用があると認識されており、黒木を蜜源としない山蜜蜂の薄い蜜やセイヨウミツバチの「ゆるい」（味のたんぱくな、薄い）蜜に対する品質の違いを区別している。くろみつの品質としては、「ねばい」（濃くねばりのある）、色が濃い、重い、とし、特に価値のあるものとされている。蜜の品質と効果に関しては、「セイヨウミツバチはミカン園などで飼われるので農薬がかかっているが、山蜜蜂の蜜はきれいである」とか、「山蜜を飲むといっぺんに汗が引く特別な力を持っている」、「心臓の悪い人でも直る」、「小さい子にはきつすぎるので、3才未満の子には見せるな、そして水で解かずにお湯で解けと、昔から言われていた」などを聞き取ることができる。このように、くろみつには食品としての清浄さと、薬効についてのさまざまな伝承が残っている。

4. 山蜜蜂を飼う道具

1) 巣箱

巣箱には丸太巣箱にほかに板の縦箱型や前あき箱型などが存在する（図1, 2, 3）。

呼び名：巣箱はゴーラ（古座川町、古座町）、ゴーパー（古座川町）、ウトー（本宮町、古座川町）、ウロー（古座川町）、ミツダル（本宮町）と呼ばれている。山蜜蜂の群れが自然に入るのを待つために置く巣箱をとくに「待ちゴーラ」とか「待ちウトわ」、「待ちダル」と呼ぶ。

材質：中空のサクラの丸太が最も良いといわれている。中空の黒木〔4〕も良い。普通はスギ



図2 家の庭先におかれた丸太巣箱（ゴーラ）丸太の入口の周辺に働き蜂がついている（古座川町）。

を用いる。マツやヒノキは蜂にとって不適である。一般に、若木でなければ30～40年持つという。一度巣がかかったゴーラや古いゴーラのほうが明らかに棲み着き易い傾向を持つ。

作り方：自然に穴のあいた木を使うが、最近ではチェーンソーで丸太をくり貫いて人工的に中空を作ることが多い。ゴーラの直径は約30cm、高さ50～60cmのものが多い。上部を木でふさぎ、下に蜂が出入りするための隙間や小穴をあける。屋根はトタン、板、笹などで作る。板で作った縦形の巣箱や百葉箱のような前あき箱もあるが、少数である。待ちゴーラの中におすすめの蜜をふきつけるとハチが棲み着き易いという。

置く場所：大木の根元や大岩の下が良く、日当たりの良い所というのが共通の意見であり、そうした条件にあったところには必ずといって良いほど巣箱が置かれている。山中ではとくに



図3 茶畑のなかに置かれた巣箱茶も蜜源になっている（本宮町）。

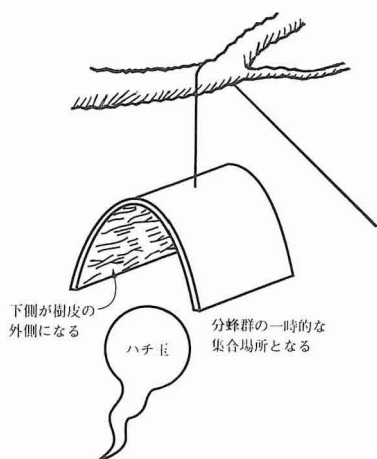


図4 ツリカワと呼ばれる分蜂群を別のゴーラに誘導するための民具

入会のような取り決めはなく、おおらかなようであるが、近年は地域外からの巣箱ドロボウもいると言う。ゴーラの下には木や石を置いて水平にし、丸太を縦に置き、下から水が入らないようにする。また自宅の横の庭先や畑の中に設置されている場合も多い。

管理：新しいゴーラの設置は、明治の人は春の社日〔6〕に、中の掃除は大安と決めていたと言う（古根川氏談）。スムシとシシバチ（スズメバチ）の襲来に注意する。

蜜の収穫：待ちゴーラの10～40%に巣がかかる。蜜切り（収穫）は、年に1回、盆前後に行い、巣の60%以下を取る。これ以上切り取らないようにするのは群れが冬期に全滅するのを防止するためであり、セイヨウミツバチの旧式養蜂における皆殺しにして採蜜する方法（渡辺，1981）とは大きく異なっている。ここにも

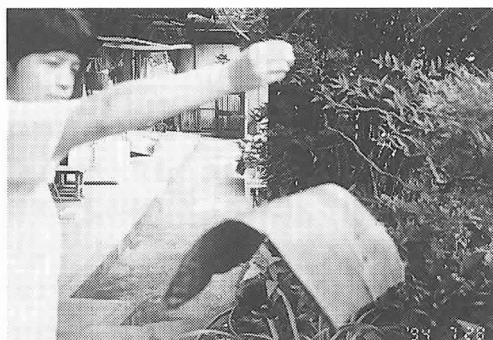


図5 ツリカワをさげたところ

大きさは50cm位で、分蜂群が固まったら運ぶ。サクラの皮で作られている（古座川）。

自然をなるべく壊さないように糧を得るという理念を垣間見ることができる。巣箱一つ当たり最高で5升（7.2リットル）、通常は2～3升（3.4～5.4リットル）採集され、バラツキが大きい。良質の蜜を採集するには、巣を押しつぶしてから静置して1週間以上かけて自然流下させる必要があるという。

2) 巣わかれ（分封）した群れを誘導するための道具（分封群の集合場所を提供し、新しい巣箱に誘導するための道具）

古座川町松根から七川にかけて明治時代にはすでに使われていた民具である（図4，5）。他に木板で作られたもの（図6）や丸太巣箱のかけらや固定式のものも存在する。現在、周辺の熊野川町や串本町でも見かけることがある。明治以前の記録は少ないが、「南紀徳川史巻之百三」の郡制第十五の産物誌一にこの民具に該当

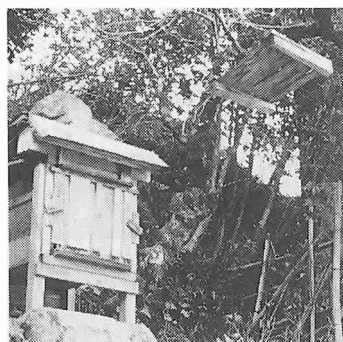


図6 木板で作られたツリカワ（熊野川町）



図7 スギの皮で作られた奥行の深いツリカワ（古座川町）



図8 スギの皮で作られた「屋根型」のツリカワ（古座川町）
図4と5のように使いやすい。

すると思われる記述がある。伊都郡新子村の貞市右衛門というものが天保10年に蜜蜂一箱を購入し、また嘉永6年に20箱を購入して有田郡道村に移住した。その技術について書かれた部分に、「其分巢せんとするに當りては桜樹の皮の剥たるものを酒に浸したし適宜の樹木に掛け王蜂をして出て之に駐らしめ子蜂の之に群集するを俟ち取りて巢箱に投する等意の如くならざる無く・・・」とある。養蜂の達人として名の知られた彼の技術が伝播・変形した可能性がある。図6のような木板を用いた誘導具は四国徳島の山間部に、固定式の板は長野県伊那谷(岩崎・井原, 1994)にもあるようである。

呼び名: ツリカワ(吊り皮)

明治時代からそう呼ばれていたが(中地氏, 串橋氏談), とくに名は付いていないという人もいる。

材質: サクラやスギの樹皮で作られ、とくにサクラがよい(中地氏談)。また、かつて山蜜蜂が棲んだような古いウトーのかけら(割ったもの)が良いとも、陰になるものなら何でも良いという人もいる。陰ができれば良いとする理由は、山蜜蜂が水を嫌うからとか、分封群が物陰に固まりやすいという現象がよく観察されるからとのことであった。しかし、一方で「蜂には樹皮や木や草花の香りなどに好みがある」という一歩踏み込んだ蜂の行動に対する認識もある。

作り方: サクラなどの木の皮を40cm×60ほどの大きさに剥離して外皮を内(下)側にし、中央に穴をあけてヒモで吊って乾かす。自然にドーム型にまがるまで乾燥させると完成である。中地氏によると、明治の人はすでにこの方



図9 茶畑の中のゴーラとツリカワ
(古座川町中崎, 5月)

法で作っていたという。様々な形のツリカワの試作を試みてきた串橋氏によると、板では集合した蜂が落やすく、図7のような深いツリカワだと、山蜜蜂がたかっても外から見難いため、時期を逃し易く、結局は図8のような「屋根型」のツリカワが最もよいと述べている。それは、結果的に松根のものと同様な形状であった。

置く場所: ツリカワは山蜜蜂が棲み着いているゴーラの横から10mまでの距離に、分封の時期だけ吊る(図9)。巣箱からの距離と巣箱とツリカワを結ぶ線と地面との角度はとりわけ重要で、分封群が飛ぶコースの所にツリカワを吊るようにするのがコツである(串橋氏談)。ツリカワを吊る適した位置は、巣箱から2間(4m位)離れた高さ3~4mの所、角度約45°の位置であり、高すぎても低すぎてもいけない。また蜂の飛ぶコースは決まっているようだが、人にはまだよくわからないところがある。それでも、周囲3箇所位に吊るしておけばほとんど失敗しないという。

使い方: 分封の時期は、働き蜂の新居探索のための偵察行動(土地の人は「見蜂(ミバチ)」とか「巣探し蜂」と呼ぶ)、雄蜂の巣からの出入り、そして王台の発達とその褐色化の観察などを参考にして推定されている。通常は5月初旬頃なので、あらかじめツリカワを吊っておく。分封は天気の良い5月頃の昼12時近く、約1時間の間に起こる。巣箱から出て来た蜂の群れは次第にツリカワにたかり始め、そして分封した群れが完全にゴウラから出終わったら、ツリカワから他に飛んでいってしまわないように、笛、チェーンソー、ドラムカンなどで音をたて

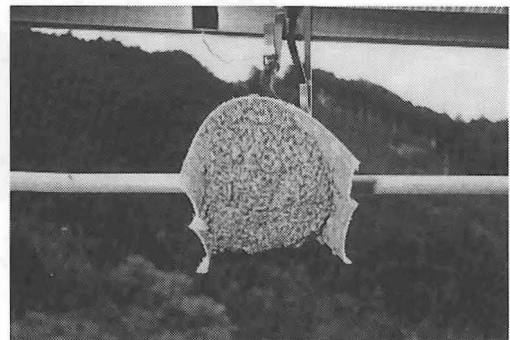


図10 ツリカワに分封群が固まったところ
(古座川町松根 中地貞吉氏提供)

たり、水や砂を蜂や周囲にかける。これを始めるタイミングが重要で、分封群が巣から外に移動中に音をたて始めると失敗するとのことである(中地氏の奥さん談)。また飛んでいきそうになった分封群は、ブリキカンを叩くと降りて戻って来ることが確かにあるという(串橋氏談)。これはヨーロッパでドラを用いて蜂を呼び戻そうとする「蜂鎮め」(渡辺, 1994)とよく似た知識である。

成功すると分封した群れはツリカワに固まって鎮まる(図10)。そして次に、蜂の塊のついたツリカワを新しいゴーラの前におくか、ゴーラの中に手で群れを入れてやるのである。そして新たに山蜜蜂の入ったゴーラを風呂敷に包んで適当な場所に移動して誘導が完了する。このようにツリカワは、詳細な蜂の行動観察をもとに、音、水、砂などと組合わせて、絶妙のタイミングでほんの短期間だけ使われるのである。

なお、山蜜蜂に水をかけるのは、蜂が水を嫌う性質があるので、雨の気配と勘違いして分封群が他に飛んでいかなくなると説明する人々もいる。明治時代には水性の人と蜂は相性が悪い(土地の言葉で「盛悪い{さかわるい}」という)と言い伝えていたというのが(古根川氏談)、これは、山蜜蜂の性質について、現代とは別の表現で言い表したものと推察される。

このように工夫した民具を用い、観察や駆け引きをして一旦は新しいゴーラに分封群を入居させてもすぐに出ていってしまうこともあり、また2日ばかりで遠方に移動して行ってしまいうこともあるそうである。人の思いどおりにならないのが難しいところでもあり、不思議でおもしろいという。ツリカワは単純な構造ではあるものの、伝統的飼養を推し進める力の一つである人々の「楽しみ」を垣間見ることができる。

道具の意義: 行動力の大きな動物の場合、動物が半栽培(半家畜)[1]から家畜化に向かう過程は、動物を人のコントロールの範囲に留め、繁殖の抑制や選抜などによって遺伝的变化が起るようになることとすると、ツリカワは山蜜蜂を人の制御下におくように群れをコントロールするための重要な道具の一つと考えられる。

その他: この地方では、分封の時期とシュンランや中国産の東洋ラン(キンリョウヘンなど)の花期が同じで、これらのランには分封群が留まり易いことが以前から知られており、分封群が花に集合して蜂玉を作ると、その熱で花がすぐに枯れてしまうという(中地, 古根川氏談)。風呂の温度と対比した触感によると、蜂玉の中心の熱は50~60℃あるのではないかという。分封群を空のゴーラに入れる時に花もいっしょに入れてやるといった工夫がされている。これらのランは普通は鉢植えにされて農家の庭先に置かれ、家のそばに置かれた巣箱からは至近距離である。これらのランは分封の時に、あたかもツリカワと同じ様な分封群誘導のための「道具」として使われている場合があるわけである。キンリョウヘンの花とトウヨウミツバチの相互関係についての民族知識が中国雲南省でも報告されている(福田, 1995)。熊野地方の、民俗知識は以前からあったのかも知れない。

5. 蜂の群れに対する人の影響

聞き取りをした人々は、蜂の貯蜜量が巣箱ごと大きく異なることから(結果4-1の蜜の収穫の項を参照)、群によって採蜜能力に差があることをよく知っており、採蜜量の多い群れに注目していることは自然なことであった。ただし、「新しい待ちゴーラに分封群が初めて入った年は、採蜜量は多いものの、安心するためか次年からは少なくなる」という認識がある。また庭先のゴーラには特別に目をかけた群れを置き、蜜を採りすぎないように注意して分封しやすくし、さらに増やそうと意図し、実行しているのが認められた。「なるべく自然のまま飼う」方針のようで、セイヨウミツバチのように砂糖をおいて群れを増殖しやすくすることはほとんど行われず、主に分封時に注意を払って野生の群から目をかけた群を選択的に増殖している。この点で、蜂に対して栽培(家畜)化の作用を与えていると推定されるので注目される。

結 語

山蜜蜂の伝統的飼養は、単に希少であるからだけでなく、栽培化の過程において行われる人

の普遍的な行為の内容を知るためのたいせつな事例と考えられる。こうした事例研究から明らかになることは、採集、半栽培そして栽培に至る途中の段階における人と生物のかかわりあいであり、絶えることのない行為をささえる人間側の要素をも知ることができよう。この要素は、過去だけでなく、将来にわたっても“活力のある生業を持続していくための力の源泉”，文化的装置（文化的態度）として基本的に重要と考えられる。この要素は、なぜ代々続いてゆくのかという素朴な疑問に対する解答の中に認められるはずである。

人側の要素は、「蜂との駆け引きが楽しい」という言葉に端的に示されるように、まず熊野地方の人々の生活の中で、市場経済的価値以外の価値があるということが上げられる。さらにこの山蜜蜂の場合、行為が継続されてゆく大切な鍵は、人々の興味を引き付ける自然の不思議さや、貴重な価値ある蜜がとれる以外に、とくに精神的に特別な位置を占めることにもあると考えられる。神聖視されること、ハレのもの（浄・不浄、吉・不吉に関係するもの）であったり、「盛り」、換言すれば豊穡のシンボルにみなされることが、栽培化という創造的な仕事が暮らしの中でなげなく行われ続ける原動力の一つになっていると推察される。

野生生物が営利目的で栽培化されることは少ないのは当然であるが、これが人々に続けて引き継がれていくには、神聖視されるような精神的なバックアップシステムが必要なのではなからうか。神聖なるものや豊穡のシンボルにはそのような機能（精神—物システムからなる民俗生態系の中で、結果的にはあれ、他の生物に対して栽培化の方向に働きかける作用を途切れさせない機能、民俗知識を運用・統御する一種の情報機能）があることが示唆される。これは民俗生態学的に重要と思われるので、今後広範に調査して行こうと考えている。

通常、民俗学は過去の歴史の理解に役立ち、歴史を通して貫く普遍の心を明らかにすることが目的の一つとされる。そのような心性が生物や生態系に及ぼす影響を考えることは、過疎や

環境問題といった技術開発のみでは解決が困難な現代の課題を解決する上で意義あると考える[7]。生業において、技術は精神生活や歴史と不可分であると認識するが、だからこそ農学の自然科学的側面と人文科学の交差する領域分野の研究が必要と考えるのである。

伝統的な生物にかかわる民俗知識や歴史の研究は、生物資源自体に対する祖先の民俗による日常の実験の積み重ねの成果を知ることにもなるため、実験をもとにした近代の科学研究と並んで重要な情報源となろう。このことは本研究でも再認識させられた。さらに個々の知識の運用を知恵と呼ぶならば、紀伊半島南部の山間部の人々の知恵を垣間見る機会でもあった。この調査で、山蜜蜂の飼養技術の背景には「なるべく自然をこわさないように付き合うのが最良である」という基本的な考え方があることを見出せたが、この意味では一つの成果であった。

最後に、山蜜蜂のようないわゆる「趣味的な」生物の飼養についての研究の意味を若干考察しておきたいと思う。確かに、このような経済的に小さな生物は、民俗学における「生業」研究でも、農学でもあまり関心が払われてこなかったことは事実である。しかしながら、「副業」であったり地域性が高いからといって、生業活動の一部であることには変わりがない。また人々が「楽しみで飼っている」ようなものを、相対的に低く見るとしたら、生業の一部を瑣末なとるに足らないものと評価して、看過する結果となろう。水鳥狩猟の民俗誌を研究している菅(1995)は、「人間がどのように生きてきたか」という側面から人間に焦点をあわせるならば、簡単に副業と表現することすらも危険であると指摘している。実際、紀伊半島南部の大島や海岸部の地帯では漁業や農林業の他さまざまなことを手がけているのが普通であり、何が副業かも不明瞭なのである。考えてみれば、現代の農業自体ですら副業的になりつつある。また、狩猟採集や半栽培の過程にある生物は通常経済的地位が低いのは当然である。これらのことを考えあわせれば、研究者が、食料生産や市場経済の上で小さいからといって、それに関する民俗

知識を瑣末であると見ることはできないことは明らかである。浮沈のある歴史的な流動に注意すればなおさらのこと、副業や趣味的な行為を無視することはできなくなる。著者は、山中であっても社会経済の激変に見舞われてもなお代々引き継がれてきたものに、逆に政治や経済には動かされにくい基層文化のような力強さを感じざるを得ず、むしろ研究する意味があると思っている。

謝 辞

現地調査の聞き取りの際に、仕事の手を休めてこころよく協力して下さった古老の方々に深謝いたします。また古座町山出泰助教育長には適切な御助言をいただき、同教育委員会森博司先生には多忙にもかかわらず調査のお手伝いや御助言をいただいた。そして田辺市杉中浩一郎氏には「南紀徳川史」の養蜂の記述について示唆に富んだ教えをいただいた。ここに感謝いたします。

(井上直人：〒649-36 西牟婁郡串本町須江 京都大学農学部附属亜熱帯植物実験所、井上 梓：〒649-35 西牟婁郡串本町 串本町立串本小学校)

引用文献

- 福田道弘. 1995. ミツバチ科学 16(1): 35-40.
 原道徳. 1981. ミツバチ科学 2(4): 157-160.
 東牟婁郡役所編. 1970. 紀伊東牟婁郡誌 (下). 名著出版, 東京. p. 222-224. (もとは1916年刊行)
 岩崎靖・井原道夫. 1994. ミツバチ科学 15(1): 7-18.
 高野山大学社会学研究室・(財)和歌山社会経済研究所. 1993. 古座町・古座川町調査報告書. p. 22-29, p. 98-101.
 南方熊楠. 1971. 本邦における動物崇拜. 南方熊楠全集, 平凡社. p. 94.
 中村 純. 1987. ミツバチ科学 8(3): 124-133.
 中尾佐助. 1976. 栽培植物の世界. 中央公論社. p. 23-29.
 中尾佐助. 1977. 季刊どるめん 13: 6-14.
 中尾佐助. 1983. 討論 半栽培とシベリア・ルートとツブ酒. 佐々木高明編「日本農耕文化の源流」. 日本放送出版協会. p. 149-161.
 野本寛一. 1990. 熊野山海民俗考. 人文書院. 62-65.
 岡田一次. 1991. ミツバチ科学 12(1): 13-26.
 小野正人. 1992. ミツバチ科学 13(1): 19-22.
 Oschmann, H. 1961. Archv. Geflugelzucht Kleintier-kunde 10: 235-255.
 澤田昌人. 1986. 季刊人類学 17-2: 61-125.
 菅 豊. 1995. 国立歴史民俗博物館研究報告 61: 215-272.
 杉本和永. 1989. ミツバチ科学 10(3): 121-124.
 吉田忠晴. 1990. ミツバチ科学 11(2): 63-66.
 渡辺 孝. 1981. ミツバチ科学 2(2): 75-86.
 渡辺 孝. 1994. ミツバチの文化史. p. 192-196, 207-216.
 Woo, K.S.1991. ミツバチ科学 12(2): 55-57.

註 記

[1] 中尾 (1976, 1977) は植物の栽培の過程に、半栽培という段階を想定している。半栽培段階とは栽培化以前に存在する「野生植物の利用段階から栽培植物にいたる中間段階」であり、その内容は (ア) 人がある自然生態系を乱す, (イ) 植物の中に新しい環境に適応したものが現れる, (ウ) 人がその中から有用なものを保護したり, 残すことである。後に植物分類学者や家畜にかかわる文化人類学者らとの議論の中で, (エ) 有用なものと認識し, 導入して放置しておいても自ら繁殖できること, が概念規定として必要であると指摘された (中尾, 1883)。山蜜蜂をこの考えによってながめると, 半栽培 (あるいは, 動物なので「半家畜」) 段階に当たると考えられる。植物よりも移動力が大きいので, (ウ) の条件が成り立つためには, 人と山蜜蜂との距離を離さない工夫が大切な要件になろう。人が群れや個体の行動圏をコントロールできて, 有用な群れや個体を選ぶことができなければ, 家畜化は起こらないと考えられる。

[2] 分類学上はトウヨウミツバチ (*Apis cerana* Fabricius) のなかの 1 亜種ニホンミツバチである (岡田, 1991)。紀伊半島南部では地域によってさまざまに呼ばれている。和歌山県西牟婁郡と東牟婁郡における民俗呼称には, やまばち (山蜂), やまんばち, わばち (和蜂), みつばち (蜜蜂), やまみつばち (山蜜蜂) がある。単にみつばちと呼んでいる場合でもセイヨウミツバチと区別できないのではなく, かつて業者が持ち込んだこともあるために形態や習性なども区別しているが, その地域の山間部にはニホンミツバチしか住めないために, 単にみつばちで通用しているのである。また, “やま” とか “わ” をつけて呼ぶ場合は, セイヨウミツバチとの比較生態的差異を認識しているだけでなく呼称の上でも明瞭に区別している。この論文では便宜的に “山蜜蜂” と表わすことにする。

[3] この考えに立つ方法は, 生態学と民俗学の比重は異なるものの, 「認識人類学」, 「民俗生態学」 (福井勝義, 松井 健ら), 「自然誌的な民俗研究」 (菅豊), 「環境民俗学」, 「生態民俗学」 (野本寛一) などの分野に共通すると考えている。近年にいたるまで, 技術に伴う精神生活については生産量に直接関係無いとみなされ, 通常は農学の研究対象にはされなかった。逆に, 村上陽一郎が指摘するように, 人文科学は

基本的には自然現象に触れないことが多かった。自然環境への働きかけや、それに対する自然の反応、またはその逆の視点は、文化史の一部としてのテーマではあったが、「科学技術」としての視点が抜けていたと考えられる。そして技術と精神文化を切り離して思考する習慣が浸透していることが、具体的に在来の思考や民俗知識を知る妨げになっていると考えられる。

[4] 黒木、(クロキ): ツガやモミなどの針葉樹をさす熊野地方の林木の伝統的分類法による種類であり、植物学上のクロキ (*Symplocos lucida* Sieb. et Zucc.) とは異なる。人によってはスギやヒノキのような植林された木以外の自生する樹種を指している場合もある。また「黒木の山」といった場合にツガやモミなどの針葉樹を指すだけでなく、トチノキなどの自生する多様な樹木で構成された植生(植林によって単純化していない山の植生)を指している。

[5] 蜂蜜の区別について: 現所在地元では、山蜜蜂が山の黒木 [4] を蜜源として集めた濃い蜜のことを「クロミツ」とか「山蜜」と呼んでいる。色は濃い茶色であり、市販されているセイヨウミツバチの薄茶色の倍近い濃さである。理由は(1)蜜源の違いと、(2)年に一回しか蜜切り(採蜜)をしないこと、(3)機械で絞らないことなどによるのだそうである。

ちなみに日本山海名産図絵や大和本草には「山蜜」のような呼び名はでてこない。(渡辺, 1981)は「山蜜」と「家蜜」という2分法が明治5年の「蜂蜜一覧」にあらわれ、それまでの中国の影響を受けた「石蜜」, 「木蜜」, 「土蜜」, 「家蜜」という4分法と異なることを指摘している。すなわち、同じ山蜜蜂の蜜でも、山と里(平野部、家のそば)を分けてそれぞれ“山”、“家”と呼び、蜜源によって蜜の品質に違いがあることを区別している。この点は現在も似ており、山; トウヨウミツバチの濃い蜜にたいして、平野; トウヨウミツバチの比較的薄い蜜かセイヨウミツバチの薄い蜜という対比がされている。

[6] 社日(しゃにち): 春分や秋分に一番近い「戊(つちのえ)」の日で、旧暦の2, 8月(現在の暦の3, 9月)である。山蜜蜂の空き丸太巣箱(待ちゴウラ)は、蜂の採蜜活動が本格化する前の3月に設置することになる。社は土の神で、「戊」は五行の土に属し、社日はそれを祀る日で、農作物の豊穰を祈願する節日とされる。陰陽五行では土は水に勝つことになっており、また「山蜜蜂は水生の人とは相性が悪い」(本宮町)という伝承があることから、山蜜蜂は家の盛衰だけでなく、土地の豊穰のシンボルとみなされている場合もあると考えられる。

[7] 菅(1995)は従来の「民俗学の対象としての生業」研究が、現代の問題の解決に役立つ面より、過去の歴史の理解に大きな重みをかけてきたと指摘している。この点は著者らも同感であるが、後者にも多くの意義を認めながらも、今後の方向次第では、現代

の価値観の転換につながる一つのきっかけになる知見が得られる研究活動であるという期待をも抱いている。

INOUE, NAOTO¹⁾ and INOUE, AZUSA²⁾. Traditional beekeeping in the southern part of Kii Peninsula in Japan. *Honeybee Science* (1995) 16 (4): 157-166. ¹⁾ Subtropical Plant Institute, Faculty of Agriculture, Kyoto University, Kushimoto, Wakayama 649-36, Japan; ²⁾ Kushimoto Elementary School, Kushimoto, Wakayama 649-35, Japan.

The authors carried out an ethno-ecological investigations of the way of rearing of “Yamamitsubachi” (Japanese honeybee: *Apis cerana japonica* Radoszkowski) being managed traditionally in the areas between mountain ranges in the southern part of Kii peninsula, having mainly collected the data by hearing from the beekeepers working there. By the way, the beekeeping of Yamamitsubachi has been thriving in the district of Kumano since modern times. In this study, we intended to make clear not only the traditional beekeeping way and the cultural meaning as well as the knowledge for the ecological traits of bees but also human effect on the bees. The authors found there their using a log hive, “GHORA”, and additionally the so-called “TSURIKAWA” for receiving and gathering a branched group of bees which has not been reported up to today yet. The latter is to induce a branched group of bees to the former which is made newly. By the way, the latter has already been used in the area of Kozagawa-Matune area in the Meiji era and they made it with dried bark of cherry tree, etc. Also in order to induce a branched group of bees there effectively, they made good use of these inducing means such as sound, water and orient orchid additionally. The beekeepers observed the behaviors of bees carefully and enjoyed the dealings with the bees and besides, the authors have found, they traditionally recognized the bees as sacred on account of “the god’s messenger of Ise shrine” or symbols of cleanness and fortune. We have observed the beekeepers are rearing the bees kept them in the GHORA in their own gardens with much care; in this case, they selectively intend to propagate a certain group of bees, which clearly telling us that the culture has entered upon the semidomestication phase.